



Title	「所沢高校問題」はどう受けとめられたか-教育原理の授業のひとこまから-
Author(s)	高野, 和子
Citation	明治大学教職課程年報, 21: 95-99
URL	http://hdl.handle.net/10291/8077
Rights	
Issue Date	1999-03-20
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

「所沢高校問題」はどう受けとめられたか

——教育原理の授業のひとこまから——

高 野 和 子

98年度前期の教育原理（月曜Ⅱ部3限）の授業において、その春のテレビや新聞で“卒業式や入学式をめぐる校長と生徒たちとの対立”という図式で話題になった埼玉県立所沢高校の生徒自治について、卒業生からの報告を聴き、議論する時間を1回もった（「所沢高校問題」については、3月から4月にかけての新聞各紙の報道のほか、まとまった資料として、例えば、子どもの人権と体罰研究会編『学校自治を豊かに一所沢高校の事例を通して』1998年7月、母と子社、参照）。この授業について、学生たちからの反応を中心に、簡単に報告したい。

1. 授業設定の経過と位置づけ

このような時間を設定したきっかけは、それぞれのクラスの様子をつかむために開講時に書いてもらっているアンケート（無記名）のなかに、“自分は所沢高校出身で、一連の問題についてみんなで議論したい”という内容のものを2つ見つけたことであった。次の授業で、このようなことを書いた人がいるが、よければもう少し話を聞かせてほしいとアナウンスすると、授業終了後、3人の女子学生がきてくれた。ふたりはその3月の卒業生、ひとりとは過年度の卒業生である。そこで、一度、授業の中で報告をしてほしいと依頼した。その後、3人は高校時代の友人たちと連絡を取りながら資料を集めたり相談したりし、直前には、どれを資料として配るか、どんな内容で話すか、誰から話すか等を決めて当日に臨んだようである。3人と高野とは1週間前に短く打ち合わせをする機会をもった。

この教育原理は「子どもの発見」をタイトルとする授業からスタートした。最後の回は「子どもの権利条約」で終わる予定で、所沢高校を取り上げたこの回は、最後から2回目に設定した。17～18世紀の近代化の過程で徐々に子どもが“小さな大人”ではなく“保護の対象”として特別な愛情と教育の対象となるべき存在と見られるようになったこと。日本の場合、近代国家を担う国民を育成する義務教育の対象として、いわば制度的に子どもが隔離され「児童」というカテゴリーに一括されたこと（「戦前日本の教育」の回）。「戦後教育改革」,「戦後教育の

50年」を経た、今日の時点で、日本の子どもはどのような扱われ方をしているのか。保護しているつもりがただ甘やかしているだけではないだろうか、あるいは、保護と型にはめることが混同されていないだろうか。次週に取り上げるように、今日、子どもを、保護の対象としてだけではなく、自立した人格をもつ権利の主体として見るのが求められているが、所沢高校の報告を聞くことで、それらを考える手がかりとしてほしい―授業の位置づけは、およそこのようなことであった（「 」内は、授業のタイトル）。

2. 授業の組み立て

まず、高野がこの授業の位置づけの説明と、新聞報道の紹介を短く行った（日経新聞の記事を資料として配付）。

次に、3人の卒業生たちが、順に、なぜ報道されたような校長との“対立”が生じたのかという事の経過と自分たちが卒業記念祭に込めた思いについて報告した。3人からは、資料として、生徒総会の議案に出された質問（日の丸・君が代問題）に対する生徒会本部の見解を載せた“FREE”（11月27日付）、「3年生一同」が校長に提出した決議文の載った四者会議発行「四者だより 保護者様 第1回卒業記念祭のお知らせ」（1月30日付）、2年2組向けの説明である「卒業記念祭をもっと知ろう！」（発行者不明、2月7日付）が配られた。

3人の報告の後は質疑応答。当初の私の想定では、階段状の大教室では質問はそう出ないだろうから、グループに分けてディスカッションし、グループごとに簡単な報告をさせたあと、私自身の意見を参考として述べようかと考えていた。しかし、実際には、質疑応答が白熱し、定刻（午後10時）に「一応ここで授業としては終了するから退席してかまわない」とのアナウンスをしたが、半数以上の参加者が止まり、閉門準備の守衛さんに促される直前までやりとりが続いた。

参加者には、翌週までに感想のミニ・レポートを書いてくるように指示し、82名の提出があった（受講者の年齢は18歳から30代半ばくらいまでの幅がある）。

3. 学生たちの感想から

ミニ・レポートにあらわれた学生たちの反応のなかから抜き書き的にあげてみる。

① 矢のような質問に対応しきった彼女たち3人に感服した

「所沢高校OBの方が生徒会に直接かかわっていないにもかかわらず、人前であまり萎縮しない態度で説明をしてくださったことや、発表後の質問にも『私は生徒会の人間でないから』と答えることもなく、自分の思うことを話すところなど、社会人を経験した私であっても非常

に勉強させられました」(3年男性)

② 報道と当事者からの話とのギャップ

「ニュースを聞いたとき、…詳しい知識がなかったせいもあり、校長が言った通り、卒業式をやればいいと思っていた。…話を聞き、詳しい事実を知ると、これは生徒对学校の権利の戦いだったと知った。」(3年男性)

「問題は生徒が『自由』と『自分勝手』をはきちがえてないかという点である。だが、授業中に配布されたプリント「卒業記念祭をもっと知ろう!」を読むと生徒が『自由』の意味をちゃんと理解し地に足をしっかりつけて記念祭を主催しようとしていることがわかる」(3年男性)

これに関しては、生徒側だけではなく、校長の意見ももっと正確に知りたかったという要望が複数あった。報告者たちが配る資料を事前に知っていた高野が準備すべきものであったのにこの点は不十分であった。

③ 十分な自治活動の経験をもてなかった参加者からの羨望の声

「私は所沢高校の話や、そのことを一生懸命説明してくれた人たちに対し、大変そうだったんだと思う反面、すごくらやましく思いました。きっと所沢高校の人たちは、学校側と思う存分議論したということ、高校時代の重大な思い出となったことでしょう」(1年女性)

「私は生徒がこんなに活発なのは魅力的であった。私の高校は教師は束縛もしなかったが私たちも無関心だった。人間が誰かに対して何か働きかけようという行動にでているということはとても羨ましいと思った」(1年女性)

「このように自分たちの学校生活とその運営を真剣に考え、ここまで一生懸命になれることに正直言って驚いてしまった。私の高校生活といえば、他校に比べて比較的ゆるい校則の中で不満はあったものの、それをいかにくぐり抜けるか、いかにしたらバレないかが問題で、自分たちで規則を作り、あるいは変えていくことなど考えも及ばなかった。要は、ゆるい規制の中に安住しているだけで、何も考えていなかったのである。考えるのがめんどくさかったのかも。まるで現代日本の縮図のように停滞し、倦怠していたと思う。何の刺激もない、つまらない学校生活だった。そして私自身が何もしようとしなかった。」(3年女性)

④ 「普通」の卒業式の経験をもとにした批判

「私は小・中・高校とずっと同じように校長先生が望んでいるような入学式、卒業式を経験してきたので、それが当たり前のように思えたり、また、静粛に行うことによって入学式・卒業式が強調され、実感がひしひしと伝わってくるようであった。そのようなやり方に私自身としても不服はなかったし先生たちが決めたことをやらされているという感じもなかったし自主性に欠けているとも思わなかった。だから、生徒たちがここまでして卒業記念祭をやりたいと思うのがわからないし、校長先生と対立してまで意見を通そうとするのかわからないと思ってしまった。」(1年女性)

「改まった式には厳粛さが必要」(1年女性)

「祭ごとのように楽しいだけの式では、責任感や社会性は芽生えてこない」(1年男性)

これらの感想は、質疑応答が卒業式・入学式をめぐる問題に集中して、所沢高校のそれまでの自治の蓄積に光を当てられなかったことの反映でもあるように思われる。

⑤生徒自治の質・水準を問うもの

「証書授与の時にはクラスのアピールのため着ぐるみを着てみたりして、従来の型にはまった式と違い自由なものだったといっていました、それは『自由』という言葉をはき違えていると思います。…私は何か『自由』という言葉の中で踊らされてるように感じました。『自由』=『形式ばった事からはずれること』というように感じられたのです」(公立高校出身。卒業式は、日の丸・君が代はなく「校歌を歌って祝辞を頂いてというシンプルだけれどきちんと」した式のあとに生徒間での催しがあって、メリハリがありよかったという1年女性)

「でも、はじめは必要だと思う。校長側の考えというのではなく、もしかしたら最後になるかもしれない卒業式を自分たちの手で死ぬまで忘れないようなものにしたいというのはよくわかるが、本当に卒業証書をクラス代表が桃太郎の格好をして受け取る必要があるのかと思う。うえからの(先輩からの?)伝統ははじめがなく、楽なものが残っていくのだと思う。生徒の自主性を特徴とした学校の生徒はいかにはじめを保っていくかによって価値が決まってくるのではないだろうか?」(自分の高校では先生は介入しなかったが、生徒の自治のレベルが低くて…という1年男性)

「あって当たり前のように考えている節が見られるような気がしました。僕が思うに、それらの良き伝統は皆さんの先輩方が先生や学校側と話し合い、勝ち取って認めさせてきたものなのは。」(中学で制服廃止の経験のある2年男性)

「所沢高校の先生たちは教育の意味を考えて昨年度の過程を見直すこと、生徒は伝統を守りたいというのならその伝統が生まれてきた背景をもう一度見直す必要があると思う」(討論の際、この点で、もっとも鋭く報告者たちに迫った4年女性)

上記最後の意見を書いた女性は、「私の高校時代は special でした」と書いていたが、総じて(当然のことながら)、自治について考えたり、行動したりした経験がある人ほど、所沢高校生が守ろうとしたものが何であるのか、そこでの自治の質についてつっこんでいる。報告者の一人は、この点で参加者を納得させられなかったのが歯がゆかったということで、ミニ・レポートでは、所沢高校の歴史と生徒会権利章典について書いてきていた。

⑥“みんなで行う”自治活動への違和感

「私はそういう行事(生徒会主催の「卒業生を送る会」のような行事―筆者注)がイヤで不愉快であった。自分が嫌いなことでも、他のある人たちは本気で楽しんでいたり、一生懸命であった。それが羨ましく、自分が本当にダメな奴のような感じになりさらに嫌だった」(4年

男性)

「卒業記念祭自体、一部の生徒にはいわゆる厳格な卒業式同様に暗黙の強制になりかねない」
(1年男性)

4. 授業を終えて

報告と質疑応答は、子どもが権利の主体として扱われているかを実例から考えてほしいという授業の位置づけにふさわしいものであったと思う。前記⑤に関わる質疑応答の中からは、生徒自治のある種の未熟さが浮き彫りにされたが、高校生が未熟であるのは当然のことでもあり、むしろそうであるからこそ、自治とはどのようなものであるべきかを意識化させ自治の力を育てる対応が教育者には求められていたはずである。未熟さが浮き彫りにされたことで、逆に、校長の対応の非教育性がより明らかになったというのが私の感想である。

もっとも印象的だったのは、学生たち自身が内からあふれる伝えたいという思いで問題提起をして議論をすることのもつ教育力である。「自分の意見を公然の場で言う。こういった経験は私自身中学校以来全くない。もっと大学生なのだから、自分の意見を言う場、つまり、教員をまじえた話し合いの場がもっとほしいと思った。今まで自分を見失った、自分の意見を持つ勇気がなかったが、あんなにも真剣に反論する仲間を見て心打たれるものがあった」(2年女性)という感想もあった。私自身、これまで、形としてマイクを学生に向けて意見を求めることはあっても、結局、講義形式に終始したことへの反省を迫られる思いであった。

授業の組み立てに関しては、私自身が二次資料から、しかも量的にも不十分にしか情報を得ていない状態で設定した授業であったため、議論の方向づけをすることをしないまま、いわばオープン・エンドで課題を投げかけた形で終わっている。ミニ・レポートを集めるのが最終回の授業であったため、どのような意見が出てきたかについて学生たちにフィードバックし、報告者から補足的な説明をうけたり、他者の意見を知ったうえで改めて議論したりすることができなかった点が心残りである。

討論のあいだ、報告者のひとりが携帯電話(PHS?)を教卓において、質問に受け答えしながらも操作していることが気になっていた。しかし、授業終了後、彼女たちをねぎらう友人たちが教卓のまわりに集まってきたとき、それは、厳しい質問に立ち向かっている彼女たちに教室内にいる友人から「ガンバレ!」のメッセージが届いていたのだということがわかった。今の若者はこのようにしてコミュニケーションをとりあうのだということに遅まきながら気づくという“おまけ”もある授業であった。

最後に、このような学びの機会を可能にくださった、荻原由佳さん(政経1年)、中西由美子さん(文1年)、青木数恵さん(文2年)に心からの感謝を送ります。